

(テキストは、M・H・シェパード著「教会の礼拝」第六章 早晚禱ならびに嘆願)

### (み言葉の礼拝への疑問)

毎月1回、第3日曜日に私が延岡での礼拝奉仕に出かける時、みなさんは「み言葉の礼拝」を行っています。そして、4月からは私が第1日曜日に鹿児島、第3日曜日に今まで通り延岡へ行くので、信徒で礼拝を守る回数が増えます。私が宮崎に来る前に、宗像と八幡の教会で勤務していましたが、この二つの教会は、私が赴任する前から、「み言葉の礼拝」を使うことを拒否して、現在も「朝の礼拝」を続けています。どうして拒否しているのか、それぞれに質問をしてみました、「ちゃんと祈禱書に、日曜日に行う礼拝が示されているのに、祈禱書にない礼拝をする必要はないだろう」「聖餐式のように始まるが、終わってみたら、肝心のものがなくて、いつの間にか終わったような気がする。」「朝の礼拝などの素晴らしい祈りを使わないのは、宝の持ち腐れみたいだ。」などの批判でした。

私自身は、「み言葉の礼拝」を1度だけ実験的にやっただけです。これについて皆さんとじっくり勉強したことがありません。なぜなら、み言葉の礼拝の最初の小さな文字の解説には、「主日またはその他の祝日に聖餐式が行われない場合、朝の礼拝または夕の礼拝に代えて用いることができる」と書かれており、聖餐式をするのが務めである司祭が、聖餐式をせずにみ言葉の礼拝をすることは、考えられない、ということからです。

しかし、今まで月1回だった朝の礼拝が2回に増えて、信徒の礼拝出席が聖餐式に比べて少ないことを心配した宗像の教会委員会で、「信徒だけで捧げる朝の礼拝が、いかに大切なものであるか、大齋節の勉強会で話してほしい。」と言われて、3年前、改めて祈禱書の意味や構造など勉強することになりました。そして、出した結論は、「祈禱書は聖公会の宝と言われるが、祈禱書という名前自身に『信徒の祈りの本』という意味が隠されている。そしてみ言葉の礼拝は、信徒の信仰を骨抜きにするのではない、危険を感じる。」という、少々過激な言葉にまとめられました。

### (祈禱書は信徒の祈りの本)

みなさんがお持ちの、祈禱書の最初を開いてください。「救主降生1990年日本聖公会祈禱書 日本聖公会管区事務所」と書かれているのが最初でしょうが、それを一枚めくっていただくと、

「本書は聖なる公会の公禱、聖奠（ sacrament ）および諸式を載せたもので、日本聖公会の所用に属する」と書かれています。

ついでに、日本聖公会法憲第2条を読むと、「教会は一定の礼拝所を所有し、主教の派遣した司祭が信徒と共に定時に公禱、聖奠および諸式を執行する。」と書かれています。

枝葉のことを最初に言いますと、「司祭が信徒と共に」と書かれています。祈禱書の礼拝は、聖職と信徒が共に礼拝できるものでなければ、教会の礼拝とは言えません。聖餐式はもちろん司祭と信徒が共に礼拝します。聖職だけで礼拝する場合がありますが、信徒が加わって悪いことはありません。昨年秋、戸畑で教役者会をしましたが、朝、聖餐式をする時に、戸畑の信徒の人が数名加わっていただきました。また、朝の礼拝は、信徒だけで行うこともありますし、教役者会のように聖職だけで行うこともあります。そして、それらが混じって一緒に礼拝することもあるのです。今月の19日から20日、5年後の夢各教会代表者会が行われますが、最初の晩には夕の礼拝、翌朝は朝の礼拝をします。

ところが、「み言葉の礼拝」というのは、司祭には参加できない礼拝です。「司祭が居るなら、聖餐式をしなさい」という指導がやってきます。私たちの捧げる礼拝に、格付けがあるのでしょうか。聖公会の

礼拝は「いつでも、どこでも、だれとでも」という原則があるはずですが、司祭が経験できない礼拝をどのように牧師は指導するのでしょうか？ また、裏を返して信徒の立場からは、朝夕の礼拝を日曜日に経験しないで、いきなり教区の集まりで朝夕の礼拝に参加して、信徒は戸惑わないのでしょうか？  
まあ、これは枝葉末節の問題です。本題に入ります。

「祈祷書」という表紙の裏には、「公禱、聖奠（サクラメント）および諸式」という三つの言葉が出てきました。前に掲げた法憲第2条にもその言葉が登場します。私たちの祈祷書には、付録の文書もありますが、その主なものは、公禱、聖奠および諸式の三つに分類できるということです。

- 1、朝夕の礼拝から諸祈祷、感謝まで・・・・・・・・・・・・・・・・公禱（英語の Common Prayer）
  - 2、聖餐式から入信の式まで・・・・・・・・・・・・・・・・聖奠（堅信式は微妙・聖奠的諸式）
  - 3、懺悔の式から礼拝堂聖別式まで・・・・・・・・・・・・・・・・諸式
- おまけ？ 聖書日課・詩編・・・・・・・・・・・・・・・・ダビデの詩

（米国聖公会の祈祷書の表紙）

# The Book of Common Prayer

and Administration of the Sacraments  
and Other Rites  
and Ceremonies of the Church

Together with The Psalter or Psalms of David

According to the use of  
The Episcopal Church



Church Publishing Incorporated, New York

一般祈祷書（信徒の祈りの本）

「コモン」とは、「共通の」「共同の」という意味のほかに、「一般人の」「平民の」という意味もあります。

そして、聖奠の実施  
また教会の他の儀式（各個教会）また式典（教区的）

詩編あるいはダビデの詩  
米国聖公会の使用に従って

\*日本語では「祈祷書」と「公禱」は別の言葉だが、英語では同じ意味である。

## （公禱は信徒による礼拝）

最近では、「公禱に聖餐式も含まれる」という人が出てきていますが、これはシェパードの本の6章の最初に「英、米の教会におきましては、一般普通に Common Prayer という語は、祈祷書のすべての式を示すようになってまいりました。」ということであって、「祈祷書で行う礼拝は公禱」と言っているようなものです。その説明では「本書は聖なる公会の公禱、聖奠および諸式を載せたもので日本聖公会の所用に属する」という文章の意味が、曖昧になってしまいます。

祈祷書の262ページ13. 問 公禱とは何ですか？ という質問への答えが

答 キリストのみ名により、神の民として共同で行う礼拝で、定められた祈祷書によって行います

この答えでいいのかもしれませんが、シェパードさんは、「一般の公禱（Common Prayer）を他の式と区別いたします事は、歴史的な根拠があるのであります。」と著書「教会の礼拝」で言っています。

そして『諸聖奠や他の諸式は、「我らの主や、あるいは教会の公的な決定によって備えられたものであります。それらの本質的要素は、決定づけられているのであります。しかし一方、教会の Common Prayer（公祷）は、厳格な意味におきまして、キリスト教徒の敬虔から自然に発生したものであります。・・・それ（公祷のこと）は本質的に信徒の礼拝と言われるべきであります。』（174~175ページ）と主張します。そのことが、牧師がいない日曜日に、信徒だけでささげる礼拝の意義に結び付く、とあって、この大斎節の祈祷書についての勉強会を行うことにしました。

狭い意味での公祷には、早晚祷と嘆願が含まれているけれど、これらの式は「ユダヤ教徒とキリスト教徒とを問わず、神の民らの日常生活の中における讃美、黙想、祈願等の豊かな経験よりもたらされたもの」であると言います。（175ページ）

日ごとの礼拝は、二つの目的を満たす。①崇拜、神様をあがめること。感謝と賛美。②神のみ言葉を聞き、愛しみを受けるもの。これは、私たちが神様との間に信仰の呼吸をしているようなものです。

### （式文の構成）

朝夕の礼拝には、四つの部分があります。これは私たちの日ごとの祈りに大切な要素です。

①懺悔（これは、聖餐式にもみ言葉の礼拝にもある）

②賛美（聖餐式では、大栄光の歌、み言葉の礼拝では、詩編第95編、キリエ、大栄光の歌など）

しかし、朝夕の礼拝では、聖書の日課を読む前後に「詩編第95編、詩編第100編、復活の歌、ザカリヤの賛歌、イザヤ第1の歌、イザヤ第2の歌、賛美の歌、万物の歌、マリヤの賛歌、シメオンの賛歌、詩編第67編、」など、多くの賛美の歌があります。

\*日曜日ではなく、週日に朝夕の礼拝に代えて用いられる朝夕の祈り（祈祷書56ページから）には、これらの歌の他に、贖われた者の賛歌、主への賛歌、キリストの栄光の賛歌、小羊の賛歌など、私たちの賛美を豊かにしてくれるものがあふれています。

③聖書を聞く ④祈願

### （早晚祷の背景）

早晚祷は、宗教改革の時、克蘭マー大主教が作ったものだが、懺悔の勧告以外は、中世の修道院から続いているもので、もとをただせば、早晚祷は4世紀の頃から平信徒によって守られており、詩編や主の祈りは使徒時代から、使徒信経は2世紀から、賛美の歌は4~5世紀のもの。しかし、古いものばかりでなく、それぞれの時代の影響を受けながら継承されてきました。アメリカでは大統領のために1928年祈祷書から入れられていますし、日本聖公会は天皇のために祈っていたこともあります。しかし、一貫している早晚祷の核心は『詩編や聖歌における神の讃美、聖書における神のみ言葉、諸祈祷の中において、神のみ助けを祈るといったような事は普遍的な原則』だと言っています（192ページ）。

### （嘆願）

司式者が唱える祈願に、会衆が簡単な応答をする形体は、ユダヤ教でも異教でも用いられており、教会もそれを取り入れて4世紀に発展。嘆願は礼拝者のあらゆる態度、讃美、懺悔、祈願を表現しています。聖公会の嘆願は中世に形作られ、祈祷書のもっとも古い部分ですが、宗教改革以来、いろんな影響を受けて、迫害の時代からの牢獄にいる人のための祈りや、現代の飛行機で旅行する人のための祈りもあります。この嘆願は、5つの部分に分かれていると言います。①神様への呼びかけ。②災害のための祈願、③我々に対する主の贖いの御業を呼び起こす懇願。④他のあらゆる人のための代祷。⑤主への根強い叫

びの短い祈りののち主の祈り。この嘆願こそ、私たちが悲劇に対して、恐れと絶望に打ち克たせるもので、神様の恵みと力に対する全面的信頼の現れ。神様の、御子を通しての贖いの業全体を私たちに知らせ、私たちが救いを確信するように導くものです。

#### (これらの式の重要性)

早晚禱や嘆願は、 sacrament に代わるものではないけれど、私たちの生命を豊富にしてくれる、と言います。第1 祈禱書(1549 年)の序文で克蘭マー大主教は次のように言っています。

『これらを用いる事によって、会衆は神の知識を一層深くわきまえられるであろう。更にその真の宗教の愛に、一層覆われるであろう』これらの式を通して、多くの人々が、神の愛と知識に導かれてきました。み言葉への信仰と従順を教育するものとしての役目を有効に果せます。『我らは生涯を通じて、来る日も、来る日も、神を崇め、罪を懺悔し、真理を学び、かつ神の御助けを願わなければなりません。』『我々は、毎日、毎晩、礼拝のために適當の時を定め、おのおのの思想と行動を潔め、それらを神の御用のために用いるのであります。』

#### (大齋節は、日曜日よりも週日が大切)

大齋節のことをカトリックやルーテル教会では四旬節と言いますが、これはラテン語のグワドラジェジマ、フランス語のカレンという、40 日を表す言葉から来ていることを、大齋始日の礼拝でお話しました。今年の3月1日から4月15日の聖土曜日まで、46日あるのですが、この期間を四旬節と呼ぶのは、この期間の6回の日曜日を除くからです。

そして改めて考えてみると、聖公会手帳や教会暦・日課表には、普段は毎週の金曜日にだけ「齋日」という字がついて、「祭に自らの心身を備える事を定められている日」ということ、具体的には、イエス様が十字架に架けられたことを思い、主日である日曜日の準備をするのが齋日ですが、この四旬節には40日間の齋日が続くので、大齋節と私たちは呼んでいるのです。週日の日数なんですね。

この大齋中、私たちはもっと生活の中で、詩編や古い賛歌に親しみたい。そのためには、信徒だけで礼拝をする時、聖餐式に似たみ言葉の礼拝だけを行うのではなく、豊かなこれらの伝統ある朝夕の礼拝を行ない、日々の生活の中に、自然と賛美の言葉が出てくるように習慣づけたいのです。

ローマ帝国がキリスト教を公認して、やがて国教になった頃、ヘブライ語で書かれた旧約聖書、ギリシャ語で書かれた新約聖書を、ローマ人にわかるラテン語に翻訳した、ヒエロニムスという有名な司祭がいました。この人は、その翻訳作業をイエス様が生まれたベツレヘムで行ないました。彼が読書黙想していると、その窓辺に周囲の畑から、詩編を歌う者の声の流れてきたことを、こんな風に書き記しています。

「その声は春の鳥の鳴く音に和して美しく耳にきこえ、花の香にまじって漂った。農夫は地を耕しながら歌い、麦刈る者、ぶどう園に働く働きびと、羊を飼う者などもまたダビデの歌(詩編)を唱えながら、そのわざをしていた。」(森讓著「信仰を生活する」より)